が西側についていますが，かっての記憶と混乱してしまいそうです。そういえば新しい図書館で北海道一周旅行の計画をたてたのでした。梅雨のない北海道の旅行は６月に限るということで，夏休み前１週間の講義の休講を式先生にお願いし，強く拒否されたときのショックは交渉した３人皆同じだったと思われます。その処理はどうしたか忘れました。　　（１０回生）

琴の音に想う

青木和子

初春の調べにふさわしく母の弾く琴の音が静かに流れてきます。その美しい響き（弾き方でなく音そのもの）に５０年以上も昔の少女時代をなつかしむ心があるのです。というのも，その琴は母が当時弾いていた物であり，つい２ケ月前までは，母の実家の蔵の中に埃をかぶって置きざりになっていたのでした。

その蔵を壊すという事で中を片付けていた際にみつけたものであり，長い歳月で糸は切れ，脇板も少し裂け，虫食いもあるという有様でした。ただ捨てるには勿体ないので修理に出したところ見事若返り元気な姿でもどってきました。半世紀もの長い間，暗い蔵の中で，じっと耐え，ようやくここに，また日の目をみることになったのです。もし私達が無視してしまったら，そのまま消え失せてしまったかもしれず，そう思うと，見えない糸でつながっていたものと不思議な想いがします。こういう事を思うのも，この５～６年外国へ旅行し，あちこちの家庭（主に米国，豪州，欧州等）に滞在し古い物を大事にする習慣を知ったからです。例えば，パース（豪州）のＪ家では，家具から日常品まで祖父母の物を，家の宝物として大切に使っています。一緒にピクニックへ行った時，大きなバスケット，食器，水筒等ほとんどが，歴史的代物？には驚きました。日本でしたら，古臭く，みっともなくて恥ずかしいとおもい，また逆に皆から冷笑されそうな感じですが彼等は平然と，いやそれよりも誇らしげに使っているのです。お金では買えない彼等の祖先の人々の想いが，そこに宿っているのでしょう。そして，それらが次の新しい世代へと受け継がれていくのです。それにくらべて，私達の生活は，どうでしょうか。

我家に帰り周囲をみまわし，その相違に驚くばかりでした。何と物を粗末に扱ってきた事かと，何かなさけない気がしてきました。

我家で唯一の歴史的代物は祖母からの古いオルガンでした。子供時代，ピアノの練習に使っていましたが，ギィーギィーとペタルのきしむ音がして親にピアノを買ってとせがんだものです。多分経済的事情でしょう。そのまま買わず仕舞いで，今日まで，そのオルガンが我家に鎮座ましましているのです。どういうわけか古くてオンボロにみえたオルガンに，急に後光がさし風格あるものに見えてきたのです。おかしな事に，その後，我家を訪れたアメリカの夫妻に誇れた最高の物は，そのオルガンでした。まさしくコペルニクス的転回でしょうか。

新年の事始めに，私もこの優雅な音に魅せられて，琴を習い始めようかと思います。上達のほどは，コトのなりゆき次第ですが……　昨年フランスのリモージュでお世話になったＡ家のＣ嬢が，そのう

ち日本を訪れ，得意のオーボエと私の琴と合奏できたら素晴らしいコトと夢をえがいています。

（14回生）

卒業生だより

古田幸子

私は現在，日本航空東京支店という所で国内及び国際線の航空券の予約発券業務についております。初めは〝いらっしゃいませ〟の一言もはずかしさで出てこない有様でしたが，慣れれば何とかなるものですね。航空会社勤務の女性といえば，すぐ浮かぶのはスチュワーデスですが，他にも一般事務はむろん，空港で働く人あるいは私のように市内営業所勤務と様々です。私は入社以来この仕事を続けておりますが，ここでは接客業という性質上，女性が主力を占め，いわゆるお茶汲み的要素は全くなく，又，国際線運賃などしょっちゅう変化しているように常に最新の業務知識が必要で，これで完璧という事はないので単調さはあまり感じませんし，結婚後も続けておられる先輩も多く働く意志のある女性にとっては恵まれた環境といえます。女子の海外研修もさかんで私も一年間パリ支店に勤務しました。女が一人海外生活をする，それも留学生としてではなく働くということはあまり広まっていませんし，一度も家を離れたことのない私にとって不安も大きかったのですが，未知の土地への好奇心の方が勝ちましてせっかくの機会だからと決心したわけです。海外支店でも東京にいる時と同様の予約発券業務が本来の仕事ですがそれらに全く関係のないお客様も多く，パスポートをなくしたとか，お金をすられたとか私設大使館といったおもむきもあります。慣れない外国で心細い思いをしている時に日本語の通じる所にきてホッとする気持は非常によくわかりますし（私自身にしても仏語はまるでダメでしたが仕事上は日本人客をもっぱらお世話してましたので何とかやれたわけです）こちらもできるだけお手伝いしたいと思うのですが，なかには何の目的や計画もなくやってきてこまった時だけ泣きついてくる若い人，ようやく日本語の通じる所にきてこれまでのうっぷんを晴らすかのように大きな態度をとる中年男性とか様々ありまして接客業のむずかしさを痛感しました。パリに行けて良かったと思う点は本や写真で見たり，あるいは旅行者として通り過ぎただけではわからない人々の実際の生活を一部にはせよ，見ることができたということでしょうか。食べる物にしても着る物にしてもマスコミの印象から受ける華やかさはなく一般にとても質素な暮しぶりでしたし，町にあふれる貧しい国（スペインとか北アフリカなど）からの移住者など，行くまで全然知りませんでした。ともかくこの期間は単に私の業務上の経験をふくらませただけではなく，私個人にとりましてもたいへん貴重な一年間でした。

（20回生）